

国文学（中世）

— 関大中世文学研究者の水脈 —

関屋 俊彦

昭和四十六年三月、卒業証書授与が終わったあとと、国67の学籍番号を持つ卒業生達は第一グラウンドの通称「お花畑」と呼ばれていた観客席に教員達を囲み記念写真を撮った。

教員の出席者の顔ぶれは、吉永登・木下正俊・神堀忍・清水好子・小島吉雄・金子又兵衛・飯田正一。期せずして「仰げば尊し」（「螢の光」だったかも知れないが）の合唱が始まった。飯田先生は、そのあだ名「イイダコ」の通り、顔を真っ赤にして大きな目に涙を浮かべていた。吉永・小島・金子の各先生方は、去っていかれる年でもあった。われわれが入学した時は、まだ千里祭は行われていたが、二年生になるとあの大学闘争の時代に入ってしまった。にもかかわらず師匠を尊ぶ気持ちは、学生達の間には、今、思い起こすと不思議なくらいにまだあった。いずれにしても、そのほか岡見正雄・伊藤正義・谷沢永一、途中で転任された平野健次の各先生方、まさに綺羅星のごとく関西大学国文学科の黄金時代といってもいい時代に国67組は巡り

合うことができたのである。

以下、一〇〇号までに掲載された中世関係の論文を取り上げ、振り返る。半世紀近くも関大で過ごしたので、いささか思い込みが激しい文となることは乞御寛恕。敬称はほとんどが習った方なので、先生としたところだが、せめて「氏」に統一する。なお、詳細は関大国文のホームページにも『国文学』目次として掲載されているので、そちらをも参照されたい。

記念すべき第一号で中世といえるのは飯田正一氏「建礼門院右京大夫考」くらいであろう。氏の印象は近世であるが、当時は専任の数も少なく、一人一人が文学史を念頭に研究・授業をされていた流れに入るのであろう。関大国文学の入学当初の印象は、万葉集であった。

小島吉雄氏が第二号に「芭蕉に於ける新古今的なものについて」を書いている。朝日古典全書の『新古今和歌集』を教科書にされていた。授業後、質問すると話が止まらなくなり、次の授業が始まっているにもかかわらず話され続け、困ったことも思い出す。あだ名は「狂言の大名」であった。

第五号に佐竹昭広氏が「凡浪考」を執筆されている。氏は『下剋上の文学』（岩波書店）で二世を風靡した。狂言研究者にとつては長い間の呪縛であった。

第十号・十一号に山脇毅氏・釜田喜三郎氏、二十一号に小高敏郎氏、二十七号に後藤丹治氏、二十九号に安良岡康作氏といった大御所の名も見える。このころは、むしろ関大の枠を超えた執筆陣であった。

風巻景次郎氏が登場するのは第二十三号「古代短歌史の終着点―藤原俊成によつて把握されたもの」からである。北海道大学から昭和三十三年に関大にいらっしやつたが、ほどなくして亡くなられてしまわれた。二十九号が追悼号で池田弥三郎・高木市之助・久松潜一各氏といった錚々たる名が連なっている。確か関大始まって以来の大学葬が行われた大物中の大物である。全集も出ていることぐらいは今の関大生には覚えていてもらいたい。

三十六号に山下宏明氏が「後藤丹治・岡見正雄校注「日本古典文学大系（太平記・三）」、四十二号に柴田実氏が「岡見正雄・赤松俊英校注「愚管抄」」の書評を寄せている。岡見正雄氏は「室町ごころ」の名論文であまりに著名。のちにそのままの題で『室町ごころ 中世文学資料集』（角川書店）が出されている。還暦をお祝いしての本であるが、それまでの弟子たちの論文の寄せ集めではなく、すべて資料という画期的な本であった。つい最近の『中世文学』六十号でも廣木一人氏が「連歌師という

「道の者」で取り上げておられる。ともかく題の付け方からしい。今後「源氏ごころ」「平家ごころ」なる論文が出たとすれば、すぐに岡見先生の二番煎じだということがバレてしまう。当時、長野誉一氏が実に軽妙洒脱な文体で「文学者評判記 国文学」（有朋堂）百名の中のひとりとして紹介されている。「な、な」の口癖を始めとして、実態は、もつと奇人の類に入る伝説に枚挙のいとまがない。しかし、このことで先生は推し量れない。存在そのものが中世なのである。目撃するだけで、中世を動を常に共にされ、徳江元正氏が影のごとく付き従っていた。角川文庫の『太平記』は途中で終わつたが、本文よりも注が多いという文庫本始まって以来のものであった。筆者の院生時代に岡見氏が国内研修ということで、島津忠夫氏が担当してくださつた。『島津忠夫著作集』第十一巻「芸能史」の校正を手伝うことも出来た。岡見氏の使われていた研究室を筆者は長年使用させてもらったことになるが恐縮するばかりである。

祇園祭の時、誰かれとなく自宅である称名寺に呼ばれ、鯖寿司を御馳走になり、本堂で雑魚寝したこともある。その時、実は鯖寿司を握る手伝いをしていたのが青木見氏であったとは、随分あとになって御本人から聞いたことである。氏は五十三号

の副題に象徴されるように『太平記』が専門。五十五号では内藤悦永氏と『滝口縁起』を翻刻している。平成二十七年に春の叙勲として瑞宝中綬章を受けられた。

伊藤正義氏は四十八号に「仮構の伝記——中世の人丸」を書いている。関大には四年間だけであったが筆者の学問上の育ての親である。第二論文集『続狂言史の基礎的研究』（関西大学出版部）や『伊藤正義中世文華論集』（和泉書院）第二巻の編集を担当し書いたことでもあるので、詳しいことは、そちらに譲る。堀口康生氏を含めた三人が能の番外曲でも読もうかということが始まった中世文学研究会は、先生を慕う俊秀が集まり、関西で中世文学研究会を知らない者は、もぐりだと思われたくらいである。『国文学』の執筆陣にも五十六号「あわびの大將物語」の橋本直紀氏、五十七号「三国伝記」と「故曾詩抄」以下の黒田彰氏（現、仏教大学教授）、外部だが氏の『中世説話の文学史的環境』を書評された阿部泰郎氏（現、名古屋大学教授）、筆者の『勸進能并狂言尽番組』を七十七号で書評された天野文雄氏（大阪大学名誉教授）がいた。六十一号に『為世入道物語』を翻刻した太田満氏、六十三号の藤岡吉徳氏「加藤磐斎伝記考証」といったなつかしい名も連なっていた。恵阪悟氏は八十七号に『勸進能并狂言尽番組』の総索引を完成してもらったが、

伊藤氏に最期まで尽くされ、現在は帝塚山大学に籍を置かれている。また、黒田氏には伊藤氏との共著『和漢朗詠集古注釈集成』全四冊（大学堂書店）の金字塔がある。

六十三号には黒田彰・大島薫阿氏の連名で「宝物集」研究文献目録稿がある。その流れの中で九十一号に岡田健太氏による『阿婆縛抄』の翻刻がある。

鶴崎裕雄氏は六十一号「真光院尊海と「あづまの道の記」について」で登場するが、長い間、非常勤をつとめられた。関学の経済学部を出られ、広島映画館にお勤めだったというが、最初、天六学舎で学ばれ、奥様を見初められたと聞く。著書に『戦国の権力と寄合の文芸』（和泉書院）・『戦国を往く連歌師宗長』（角川書店）など多数。島津忠夫氏との素晴らしいコンビで、連歌宗匠として杭全神社を中心に全国各地の連歌会を指導されている。『朝日新聞』に実際の連歌興行についての連載もある。七十二号に筆者の『狂言史の基礎的研究』の書評をくださった。氏の薫陶を得て八十七号に瀬戸祐規氏が『朝倉始末記』を載せている。

蔭木英雄氏は四十一号「義堂周信の文学観と詩風」に象徴される禅文学研究者。相愛大学名誉教授。『中世禅林詩史』（笠間書院）・『狂雲集』（春秋社）・『義堂周信』（研文出版）等著書多

数。Wikipedia「関西大学の人物一覧・著名人・研究」にその名を連ねていらっしやる。

『国文学』には執筆されていないが、最後に忘れられない方お二人を挙げておきたい。一人は平野健次氏。最初の授業で世の中に三種類の『国文学』と名付ける雑誌がある。至文堂と学燈社それに関大のそれである。中で一番歴史の古いのは関大の『国文学』であると、これは新入生を勇気づけることばであった。岩波講座『日本の音楽・アジアの音楽』なども執筆されているが、中で福島和夫氏と『日本音楽・歌謡資料集（楽譜総集篇）』（昭和五十二年六月・勉誠社）を出されている。影印でゴマ節の流れがよくわかる。福島氏は上野学園大学元理事長でもあり、陽明文庫でお会いした折、そうとも知らず、お酒を御馳走になったことである。

次に能楽シテ方金春流七十九世の金春信高氏もあえて挙げておきたい。『動かぬ故に能という』（講談社）との題からしてひきつける、著書の奥書には「関西大学専門部国漢科卒」と明記されていて、学生時代から心強く思ったものである。残念ながら二〇一〇年九十歳でなくなられた。

（せきや としひこ／本学教授）